仁平義明編『嘘の臨床・嘘の現場』（至文堂，「現代のエスプリ」481：2007）

記憶植えつけ実験はゆるされるか

——ジム・コウアンが巻き込まれた嵐のような出来事

仁平義明

一度目のインタビュー

インタビュアー「次は、君が結婚式に出たときのこと。六歳のとき、君は結婚披露宴に出て、ほかの子たちと走りまわっていて、テーブルにぶつかった。そしてパンチボウルがひっくり返って花嫁の親ごさんにかかってしまったよね」

大学生「なんにも思い出せないですよ。そんなことがあったって聞いたこともないし。六歳のときですか」

インタビュアー「そうだよ」

大学生「なんにも思い出せません」

インタビュアー「何か、一部でも思い出せない？」

大学生「六歳のころは、スポーケンに住んでたかな。あとはだめです」

二度目（二日後）のインタビュー

インタビュアー「次は、君が六歳のときに、結婚式に出たときのこと」

大学生「結婚式は、スポーケンにいた僕の友だちの

お兄さんの。彼女のお兄さんが結婚したんですよ。場所はワシントンのPでした。彼女の家族はそこの出身で、夏か春でしたね、外は暑かったから。野外の結婚式で、ぼくは走り回っていてなんかにぶつかって、パンチボウルだったかな、汚しちゃって、大声をあげたんです」

ある実験の被験者になった大学生の話である。大学生は、実験者（インタビュアー）から、学生が子どもの頃のいくつかの出来事について記憶があるかどうかを問われていた。結婚式はその一つである。一度目は、結婚式についてはまったく何も記憶がないと言っていたのに、二日後、ふたたび記憶を問われると、彼は、結婚式でパンチボウルにぶつかって人にひっかけてしまったと、自ら語りだした。関係した人々、その日の気温の高さ、場所までもである。

じつは、彼は、パンチボウルにぶつかったことはない。それどころか、彼が「思い出した」六歳のときの結婚式は実在しなかった。そのことは、事前に彼の親から確認をとってある。大学生には、子どものころの、無かった経験の記憶がみごとに植えつけられた。他にも、二度目、三度目のインタビューで、ありもしない子どもの頃の経験を自分の記憶として自ら語りだす被験者たちがいた。

この実験を行ったのは、アメリカ、ウエスタン・ワシントン大学の心理学者ハイマンたちである（Hyman, Husband, & Billings, 1995）[7]。

ハイマンたちの記憶植えつけ実験

ハイマンたちは二つの記憶植えつけ実験を行ったが、最初にあげた例は二番目の実験で被験者になった学生である。

実験は次のような手順で行われた。

(1)大学で心理学入門を受講している学生に協力を求め、親たちに質問紙を送付してもらう。

(2)親への質問紙では、学生が子どもの頃の出来事について尋ねる。十の出来事が、学生が二歳から十歳までの間に実際に起こったかどうか。もし、あれば、いつどこで起こったか。どんなことが起こったか。どんな人が出来事に関係していたか、である。

(3)十の出来事のうち七つは、①迷子、②入院、③誕生日の

特別な出来事、④ペットの死、⑤家族旅行、⑥有名人との遭遇、⑦コンテストでの受賞、であった。

残りの三つは、あまり起こりそうもない出来事で、学生が子どものころに起こらなかったことを親に確認した上で、記憶植えつけ実験に使われた出来事である。

⑧自動車内に一人で残されたとき、パーキング・ブレーキをいじったために、車が動き出して何かにぶつかったこと。

⑨スーパーマーケットにいたとき、火災検知器が誤作動したためスプリンクラーが働いてしまい、避難したこと。

⑩友人の家族の結婚披露宴で、パンチボウルを間違ってひっくり返してしまったこと。

(4)親の回答で、①～⑦のうち、少なくとも三つの出来事が実際にあったと報告され、かつ⑧～⑩がなかったことが確認された学生が実験の対象になった。

(5)学生には三回にわたってインタビューを受けたが、そのとき、一人あたり三つの出来事について質問をされた。うち二つは、親からの情報で実際にあったことが確認されている出来事。残りの一つが⑧～⑩のうちで、実際にはなかった出来事だった。

(6)一回目のインタビューで最初のヒントは、たとえば、「結婚式」という出来事の名称と年齢だけである。学生がそんな出来事は記憶に無いと言うと、実験者は、その出来事が起こった場所、そこでの出来事の内容、行動、関係していた人、つまり偽りの出来事を情報として与えた。

(7)二度目、三度目のインタビューは、月・水・金、火・木・土のようにそれぞれ二日間隔で行われる。二回目で思い出せないという答が返ってきたときには、前と同じような偽りの情報が与えられた。

最初の例のように、二度目で記憶が植えつけられる被験者もいたが、三度目ではじめて誤った記憶を語る被験者もいた。二度目に自ら偽りの記憶を語りだした被験者は五一人中九人（一七・六％）、三度目までに偽りの記憶を語った大学生は、一三人（二五・五％）、全被験者のおよそ四分の一になっていた。

ひっかきまわされた子どもの頃の記憶

たしかに、大学生たちは、自分が実際に経験しなかった子どものときの記憶を植えつけられた。けれど、学生たち

は、いったん植えつけられた記憶をどうやって消去したのだろうか。その日の気温が高かったことまで記憶の中に生まれたものを、それは嘘だったと言われてどう感じたのだろうか。じぶんの大事な子どもの時期の記憶をひっかきまわした実験者に対して、怒りの感情はわかなかっただろうか。どんなふうに怒りを表現したのだろうか。実験者は、いったんつくられた記憶をどうやって消去したのだろうか。

被験者に植えつけた記憶を消去する努力については、論文には書かれていない。実験後に、被験者には実験者から、出来事は実際には無かったこと、こうした記憶への取り込みはごく普通のことで、そうなるはずだと予測していたと告げられた、と書かれているだけである。

この実験は、ゆるされる実験だろうか。

ハイマンたちの実験には、先行する研究がある。この種の実験の最初のアイデアは、アメリカ、ワシントン大学の心理学者エリザベス・F・ロフタスに源があった。しかし、この話は、ロフタスよりも、その指導学生であったジム・コウアン（James Coan）の目から語られた方がよいだろう。学生だった彼が、思いもよらない経緯から、マスコミの注目の的になり記憶植えつけ実験をめぐる深刻な論争の嵐の渦中に投げ込まれ、さらにその嵐に翻弄されたからである。コウアンとロフタス、それぞれの記述をもとに、何が起こったかをたどってみよう（Coan, 1997; Loftus, 1999）[8]。

「ショッピング・モール迷子」実験

ジム・コウアンは、一九九一年、ワシントン大学の三年生だった。彼は、将来は医学の道に進もうと思っていた。コウアンは、たまたま、エリザベス・ロフタスが学部学生向けに開講していた認知心理学（Cognitive Psychology）の授業をとった。ロフタスは、世界的に知られた記憶の研究者だった。この時点で、コウアン自身は、発達心理学と臨床心理学、社会心理学のちがいもよくわからない学生だったと述べている。

当時、ロフタスは「抑圧された」性的虐待の記憶の回復についての論争のさなかにいた。

彼女は学生たちに宿題を出した。こんな理屈である。

トラウマティックな出来事は、ときには抑圧されて思い出せないという議論がある。そうした「抑圧されたトラウ

マティックな記憶の回復」が心理療法家によって行われることがあるが、記憶を回復させようとするときに誘導の仕方によっては、じっさいに存在しない経験の記憶を誤ってつくりだしてしまう危険もある。たぶん、誘導の仕方次第で、経験しなかった子どもの頃のトラウマティックな出来事の記憶も、つくり出すことは可能だと思われる。たとえば、ショッピング・モールで迷子になるようなことは、子どもにとってはある程度トラウマティックである。そんな記憶もつくりだせるはずである。じつは、ロフタスは、この年すでに友人の家で開かれたパーティで、友人に迷子のつくり話を示唆し、その友人は自分の娘に試していた。

ロフタスが学生たちに出した課題は、だれかを幼いころにショッピング・モールで迷子になったと信じ込ませる実験を計画することである。この課題にロフタスは、授業の加算点（ジムの記憶では五ポイントだった）を出すと言った。ジムは、加算点が欲しかったし、これは面白いとも思った。

ジムは、三部の同じ冊子をつくった。一部は妹用、一部は弟のクリス用、もう一部はお母さん用だった。冊子には、ページ上部に、その下の方に彼女たちにそれを読んで思い出したことを書いて欲しいと思った状況のあらすじが書かれていた。三つのストーリーは実際に起こったこと、そして一つのストーリーが、こんな偽りのことだった。

「それは一九八一年か八二年のことだった。ぼくの記憶ではクリスは五歳だった。ぼくたち家族はスポーケンの大学街のショッピング・モールに行った。そのとき、ぼくは十二歳。どうしてだったか、クリスが迷子になってしまった。みんなしばらくパニックになったが、クリスは、背の高い年配の男の人（たしかフランネルのシャツを着ていたと思う）と一緒だったのを発見された。クリスは泣いていて、その男の人の手をつかんでいた。男の人の説明では、クリスが泣いて歩き回っていたのを目にしていたが、しばらくしてクリスは親を探すのを手伝って欲しいと言ったという」

ジムは三人に、これから六日間、毎日、四つそれぞれのストーリーについて思い出すことを空白のページに書いていくように求めた。

ジムの妹は、でたらめな記入の仕方をしたので、妹につ

いては実験をあきらめた。お母さんは、何も思い出せなかった（当然である）。弟のクリスは、この架空の話を詳しく思い出していった。しかも、冊子で示唆していなかった事もいろいろ付け加えて思い出した。

ジムは、ロフタスに報告した。ロフタスは喜んで、ジムにさらにクリスにインタビューして録音もするように示唆した。クリスは、どんどん話した。年配の男がどんな格好だったか、クリスにどんなことを話したか。お母さんが話した内容まで思い出していった。

クリスに、自分の記憶に自信がどれくらいあるかを、十一段階で判断してもらった。記憶がこの上なくはっきりしているのを「十一」、まったく記憶がないのを「一」とすると、クリスの自信は「八」、記憶にはかなり自信があった。ロフタスは、ジムに、実験後にクリスに実験について本当のことをどう打ち明けたらよいかも示唆していた。真実を説明されたクリスは、こう言った。

「ほんとうなの。でも、ぼくは迷子になったことを思い出したよ……お兄ちゃんをさがしてて、ぼくは泣いてた。お母さんは、どこにいたの、もうこんなことしないでよ、と言ったんだ」

クリスは、ジムに、自分をだますことになったこの実験に対して、とくに気にしていない、と言った。

ニューヨーク・タイムズの報道

録音を聞いたロフタスは、今度サンフランシスコで開かれるアメリカ心理学会で彼女が記憶について話をする予定になっているが、そこでこの録音を紹介してよいかジムに尋ねた。ジムは驚いた。自分のやったことが紹介されるのは誇らしかった。ジムは、ロフタスのもとで、この問題を卒論のテーマにすることにした。

ジムは、嵐に巻き込まれる結果になった。

一九九二年七月二十一日、ニューヨーク・タイムズに、ダニエル・ゴールマン（Daniel Goleman）は「子どもの頃のトラウマ―記憶か、つくりだされたものか？」という記事を書いた。記事は、当時大論争になっていた性的虐待の記憶の回復についてだった。記事は、「悪魔か？　それとも魔女狩りか？　男性や女性が突然に子どもの頃のトラウマティックな出来事を思い出すケースが続出していることが、記憶とトラウマを研究する心理学者たちの間に議論を巻き起こしている」という文ではじまっている。このころ、

心理療法家たちの一群は、本人にも理由のわからない長年の抑うつや対人上の問題の背後に、性的虐待を受けた記憶の抑圧がひそんでいると考えていた。そして、催眠や他の誘導法によって、抑圧されていた虐待の記憶が回復されたと主張したのである。

子どもが親を、「回復された」記憶によって告発するケースが続いた。臨床の世界では、虐待された記憶の回復療法は一大ブームになっていた。しかし、他の証人や他の犠牲者の証言がある場合は別として、その裏づけを探すことは難しい。この年、「フィラデルフィア〝偽りの記憶〟症候群財団（the False Memory Syndrome Foundation in Philadelphia）」が、告発は偽りだとする六五〇人以上の親たち（主に父親たち）によって設立されたことも、記事には書かれている。

当然、実際に被害があったケースが少なくないと考えられるが、同時に、セラピーでの誘導法は、ときとして誤った記憶をつくりだしてしまう危険があることを、記憶の研究者たちは警告しはじめた。ロフタスは、その代表的な一人だった。この議論は、心理療法の臨床家たちと実証的な記憶研究者たちの対立という様相を呈してきた。だからロフタスは、幼児期のトラウマティックな記憶がかんたんに植えつけられることを例示する実験を行おうとしたのである。

ゴールマンは、ロフタスにインタビューをして、記事をジムとロフタスの紹介で結んだ。「大学院生ジェームズ・コウアンと共同で、ロフタス博士は、被験者に子どもの頃に実際にあった三つの出来事について書かせた。そして、四番目に、その人物が子どもの頃に迷子になったという偽りの出来事について、そのときの（偽りの）状況を紹介してから、さらにそのことについて書くように求めた。……被験者は、それが事実ではないことに気づかずに、自分で偽りの出来事について状況をさらに詳しく書いていったのである」

ロフタスは、この記事の直後、一九九二年八月、ワシントンで開催されたアメリカ心理学会で「抑圧された記憶は現実か」という講演を行った。クリスの話の録音は、ここで紹介された。

昨日まで無名の学生だったジム・コウアンは、アメリカで最も有名な学生の一人になっていた。

有名になったジム・コウアンに起こったこと

有名になったことは、ジムに幸福とは反対の結果をもたらした。

ジムは、この記事が出る二年前から、「命の電話」(crisis phone lines)を受ける危機クリニックで仕事をしていた。記事が出てから、彼のスーパーバイザーだった心理療法家は、ジムの研究は人を傷つけるものだと非難した。非難は感情的になっていった。クリニックの他の人たちからも、彼は敵意を向けられることになった。匿名電話も続くようになった。電話番号を変えたいと思うほどだった。

学内でも研究を非難する臨床系の学生が出てきた。ジムは、こうした学生の前では口を閉ざすようになった。いい雰囲気になった女子学生が、ジムの卒論のテーマを聞いたとき、こう言った「それって、もしかしたらショッピング・モール研究?」。関係は、おしまいになった。

ジムは、卒論の発表が終わったら、もうこの研究プロジェクトに参加するのはやめようと決心した。彼は以前から誘われていたゴットマン(Gottman)の研究室に移ることにした。彼の卒論発表の部屋は、卒論発表では異例なほどの人で溢れていた。これで終わりだった。研究プロジェクトは、ジムの代わりに別な学生、ジャクリーン・ピックレルが主になって進めることになった(Loftus, Coan, & Pickrell, 1996)[9]。

研究の社会的意義は免罪符か

ショッピング・モール実験は、公にも批判を受けることになった。批判論文とロフタスの反論が続いた(Crook & Dean, 1999a; Crook & Dean, 1999b; Loftus, 1999; Herrmann & Yoder, 1998)[3][4][8][6]。なかには、つまらない非本質的な非難と返答もあって、そのやりとりを詳しく述べるのは創造的ではないだろう。

ジムとロフタスが研究をするにあたって、記憶を植えつける研究の倫理判断は、大学の人間を対象とする研究倫理委員会に提出された。対象者をだますことになる研究であることから、さまざまな注文が委員会から出されたが、計画の修正ののち最終的に研究計画は委員会で了承された。予備的なジムの研究が、それ以前に行われたのではないかという非難(Crook & Dean, 1999b)[4]もあるが、それ自体は問題の本質ではない。

ショッピング・モール実験の意義は、セラピーによっては誘導の仕方次第で、誤った性的虐待の記憶が生まれる危険性を指摘することにあった。

しかし、研究が持つ「社会的意義」は、つねに研究の免罪符だろうか。

心理学史上最も評価も悪名もともに高いミルグラムの服従の実験(Milgram, 1963)[1]は、多くの非難を浴び(たとえば、Baumrind, 1964)[10]、実験心理学における倫理の問題を意識させる最大のきっかけになった。この研究は、最初の論文のイントロの部分に示唆されているように、なぜナチスによるユダヤ人虐殺が行われていったのか、その理由を明らかにするという意義、そして冷酷ではないごく普通の人間が戦争のような異常な状況ではなくても、理由さえあれば、命令に従って非人道的なことを行う可能性が高いことを指摘するという意義を持っていた。それでもなお、被験者が実験中に感じた心理的葛藤の強さ、実験後に自覚せざるをえなかった自分のある意味での弱さに対する嫌悪感は、はかり知れないものがある。ミルグラム(一九六四)[11]は、こう弁解している。まず、被験者は途中で実験をやめる権利を持っていた。しかし、それでも命令に服従すると思ったからこそ、この実験は行われたはずである。第二は、被験者たちの八四%が、意義のある実験に参加してよかったと報告し、五分の四の被験者が、この種の実験はもっと行われるべきであると答えていたという弁解である。しかし、そう思わないことには、被験者が自分の「非人道的な」行為を合理化する術はなかったと思われる。服従はもっともらしい理由づけを伴うということこそが、ミルグラムが出した結論だったはずである。

実験の社会的意義を言うことは、必ずしも研究の免罪符にならないことを、ミルグラムの研究は示している。

一時的にであれ、わずかであれ、実験中であれ実験後の説明時であれ、なんらかの心理的マイナスをもたらす実験は、実験がもたらすマイナスよりも実験がもたらすプラスがはるかに大きく、またなんらかの理由で必要な場合にだけ、行われてよいだろう。ただし、この場合は、実験前に対象者に本当のこと、起こりうるプラスとマイナスを説明して了解をえるインフォームド・コンセントは不可能である。だからその場合のプラスは社会一般にとってもプラスをもたらすだけでなく、被験者本人へのプラスをもたらす

ものでもなければならない。

第二のロフタスとコウアン

この論を書いたのには、理由がある。

筆者自身、一九九六年に一人の学生を指導して、子どもの頃の記憶を大学生に植えつける実験を行った体験があるからである。その体験の答は、記憶植えつけ実験を行うのは、対象が子どもだろうと大学生だろうと、「アウト」である。

ハイマンたちの実験は、被暗示性が高い子どもだけでなく、大学生にも記憶植えつけが可能であることを示していた。しかし、『Science』のような科学誌に心理学で劇的な結果を報告した研究は、追試をしてみると同じ結果にはならず再現性が低いことが少なくない。結果をうのみにして紹介すると、やけどをすることになる。

そこで、追試をしてみようと思った。一九九五年度の大学での講義で記憶植えつけ研究を紹介し、さらに指導していた学生の一人に共同研究として記憶の植えつけ実験を勧めた。学生は、実験をした。植えつけるテーマは、入院、家族旅行、入学式だった。この当時は、まだ東北大学には人間対象実験の倫理審査委員会はなかった。

結果は成功だった、そして大失敗だった。記憶の植えつけは成功だった。三回の面接で記憶があると言い出すようになったのは、被験者の二二・七%だった。

この植えつけがうまくいくほど、失敗は大きくなった。実験者になった学生と被験者になった友人の関係は気まずくなってしまった。それは、すべての実験の終了から時間がたって、はっきりしてきた。

実験者の学生と被験者の間の気まずさは、今度は、その学生と指導をした私の間の気まずさに変わってしまった。私の判断は誤りだった。その意味で、私とその学生は、第二のロフタスとコウアン、いや何番目かのロフタスとコウアンだったといえるかもしれない。

この実験がゆるされないのは、被験者の気持ちを傷つけるからだけではない。もう一つの理由は、いったん植えつけられた記憶を消すと同時に、その前の記憶の状態を回復させる方法を、われわれが持っていないからである。

とはいえ、この論文は、記憶の歪みやすさという事実を否定するものではない。むしろこれまで自分自身が行ってきた多くの実験、学生を指導して行った実験を振り返ってみると、記憶ほど容易に変容するものはない（たとえば、Nihei, 2004）[12]。記憶について解釈をしようとする臨床家、記憶について実験を行おうとする研究者はともに、それぞれ別な意味の危険性に細心の注意を払うべきだろう。

〔引用文献〕

(1) Baumrind, D. 1964 Some thoughts on ethics of research : After reading Milgram's "Behavioral study of obedience". *American Psychologist*, 19, 421–423.

(2) Coan, J. 1997 Lost in a shopping mall : An experience with controvrsal Research. *Ethics & Behavior*, 7, 271–284.

(3) Crook, L. S. & Dean, M. C. 1999 a "Lost in a shopping mall" –A breach of professional ethics. *Ethics & Behavior*, 9, 39–50.

(4) Crook, L. S. & Dean, M. C. 1999 b Logical fallacies and ethical breaches. *Ethics & Behavior*, 9, 61–68.

(5) Goleman, D. 1992 (July 21) Childhood trauma : Memory or invention? *New York Times*.

(6) Herrmann, D. & Yoder, C. 1998 The potential effects of the implanted memory paradigm on child subjects. *Applied Cognitive Psychology*, 12, 198–206.

(7) Hyman, I. E. Jr., Husband, T. H., & Billings, F. J. 1995 False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 9, 181–197.

(8) Loftus, E. F. 1999 Lost in the mall : Misrepresentations and misunderstandings. *Ethics & Behevior*, 9, 51–60.

(9) Loftus, E. F., Coan, J. A., & Pickrell, J. E. 1996 Manufacturing false memories using bits of reality. In L. M. Reder (Ed.), *Implicit memory and metacognition*. Lawarence Erlbaum Association, Inc. Pp. 195–220.

(10) Milgram, S. 1963 Behavioral study of obedience. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 371–378.

(11) Milgram, S. 1964 Issues in the study of obedience : A reply to Baumrind. *American Psychologist*, 1967, 1–11.

(12) Nihei, Y. 2004 One hundred Mona Lisas : Gender- specific encoding of memory. *5th Tsukuba International Conference on Memory. Tsukuba*.

〔にくい・よしあき　東北大学大学院文学研究科心理学講座教授〕